

[B年] 聖霊降臨節第17主日(2026年9月13日)**【旧約聖書日課】申命記 15章1～11節**

¹七年目ごとに負債を免除しなさい。²負債免除のし
かたは次のとおりである。だれでも隣人に貸した者は
皆、負債を免除しなければならない。同胞である隣人
から取り立ててはならない。主が負債の免除の布告を
されたからである。³外国人からは取り立ててもよいが、
同胞である場合は負債を免除しなければならない。

⁴あなたの神、主は、あなたに嗣業として与える土地
において、必ずあなたを祝福されるから、貧しい者は
いなくなるが、⁵そのために、あなたはあなたの神、主
の御声に必ず聞き従い、今日あなたに命じるこの戒め
をすべて忠実に守りなさい。⁶あなたに告げたとおり、
あなたの神、主はあなたを祝福されるから、多くの国
民に貸すようになるが、借りることはないであろう。
多くの国民を支配するようになるが、支配されること
はないであろう。

⁷あなたの神、主が与えられる土地で、どこかの町に
貧しい同胞が一人でもいるならば、その貧しい同胞に
対して心をかたくなにせず、手を閉ざすことなく、⁸彼
に手を大きく開いて、必要とするものを十分に貸し与
えなさい。⁹「七年目の負債免除の年が近づいた」と、
よこしまな考えを持って、貧しい同胞を見捨て、物を
断ることのないように注意しなさい。その同胞があな
たを主に訴えるならば、あなたは罪に問われよう。¹⁰彼
に必ず与えなさい。また与えるとき、心に未練があっ
てはならない。このことのために、あなたの神、主は
あなたの手の働きすべてを祝福してくださる。¹¹この
国から貧しい者がいなくなることはないであろう。そ
れゆえ、わたしはあなたに命じる。この国に住む同胞
のうち、生活に苦しむ貧しい者に手を大きく開きな
さい。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二 9章6～15節

⁶つまり、こういうことです。惜しんでわずかしな種
を蒔かない者は、刈り入れもわずかで、惜しまず豊か
に蒔く人は、刈り入れも豊かなのです。⁷各自、不承不
承ではなく、強制されてでもなく、こうしようと心に
決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛し
てくださるからです。⁸神は、あなたがたがいつもすべ
ての点ですべてのものに十分で、あらゆる善い業に満
ちあふれるように、あらゆる恵みをあなたがたに満ち
あふれさせることがおできになります。⁹「彼は惜しみ

なく分け与え、貧しい人に施した。彼の慈しみは永遠
に続く」と書いてあるとおりです。¹⁰種を蒔く人に種を
与え、パンを糧としてお与えになる方は、あなたがた
に種を与えて、それを増やし、あなたがたの慈しみが
結ぶ実を成長させてくださいます。¹¹あなたがたはす
べてのことに富む者とされて惜しまず施すようになり、
その施しは、わたしたちを通じて神に対する感謝の念
を引き出します。¹²なぜなら、この奉仕の働きは、聖な
る者たちの不足しているものを補うばかりでなく、神
に対する多くの感謝を通してますます盛んになるから
です。¹³この奉仕の業が実際に行われた結果として、彼
らは、あなたがたがキリストの福音を従順に公言して
いること、また、自分たちや他のすべての人々に惜し
まず施しを分けてくれることで、神をはめたたえます。
¹⁴更に、彼らはあなたがたに与えられた神のこの上な
くすばらしい恵みを見て、あなたがたを慕い、あなた
がたのために祈るのです。¹⁵言葉では言い尽くせない
贈り物について神に感謝します。

【福音書日課】マルコによる福音書 14章1～9節

¹さて、過越祭と除酵祭の二日前になった。祭司長た
ちや律法学者たちは、なんとか計略を用いてイエスを
捕らえて殺そうと考えていた。²彼らは、「民衆が騒ぎ
だすといけないから、祭りの間はやめておこう」と言
っていた。

³イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモン家に
いて、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、
純粹で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を
持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎか
けた。⁴そこにいた人の何人かが、憤慨して互いに言っ
た。「なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか。⁵この
香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施
すことができたのに。」そして、彼女を厳しくとがめ
た。⁶イエスは言われた。「するままにさせておきな
さい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いこ
とをしてくれたのだ。⁷貧しい人々はいつもあなたがたと
一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。
しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではない。⁸こ
の人はできるかぎりのことをした。つまり、前もって
わたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。⁹
はっきり言うておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝
えられる所では、この人のしたことも記念として語り
伝えられるだろう。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

申命記 15章1～11節

¹あなたは七年のおわりごとに負債を免除しなければならない。²免除のしかたは次のとおりである。すべての貸し主は隣人に貸したものを免除しなければならない。隣人や同胞から取り立ててはならない。主が負債免除を告知されたからである。³外国人からは取り立ててもよいが、同胞があなたに負っている負債は免除しなければならない。⁴あなたの神、主が相続地としてあなたに所有させる地で、主は必ずあなたを祝福されるから、あなたの中に貧しい者は一人もいなくなるであろう。⁵ただ、そのためには、あなたは、あなたの神、主の声に必ず聞き従い、今日あなたに命じる戒めをすべて行わなければならない。⁶あなたの神、主は、あなたに告げられたとおりあなたを祝福されるから、あなたは多くの国民に貸すようになり、借りることはない。また、多くの国民を支配するようになるが、支配されることはない。

⁷あなたの神、主が与えられた地のどこかの町で、あなたの兄弟の一人が貧しいなら、あなたは、その貧しい兄弟に対して心を閉ざし、手をこまねいてはならない。⁸彼に向かって手を大きく広げ、必要なものを十分に貸し与えなさい。⁹あなたは心によこしまなことを抱き、「七年目の負債免除の年が近づいた」と言って貧しい同胞に物惜しみをし、彼に何も与えないことのないよう気をつけなさい。彼があなたのことで主に訴えろと、あなたは罪に問われることになる。¹⁰彼に惜しみなく与えなさい。与えるときに惜しんではならない。そのことで、あなたの神、主は、あなたのすべての働きとあなたのすべての手の業を祝福してくださる。¹¹この地から貧しい者がいなくなることはないので、私はあなたに命じる。この地に住むあなたの同胞、苦しむ者、貧しい者にあなたの手を大きく広げなさい。

コリントの信徒への手紙二 9章6～15節

⁶つまり、こういうことです。惜しんで僅かに蒔く者は、僅かに刈り取り、豊かに〔別訳→祝福して〕蒔く者は、豊かに刈り取るのです。⁷各自、いやいやながらではなく、強いられてでもなく、心に決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛してくださるからです。⁸神は、あらゆる恵みをあなたがたに満ち溢れさせることがおできになります。こうして、あなたがたは常にすべての

ことに自足して、あらゆる善い業に満ち溢れる者となるのです。

⁹「彼は貧しい者に惜しみなく分け与え

その義は永遠に続く」

と書いてあるとおりです。¹⁰蒔く人に種と食べるパンを備えてくださる方は、あなたがたに種を備え、それを増やし、あなたがたの義の実を増し加えてくださいます。¹¹あなたがたはすべての点で豊かにされて真心溢れる者となり、その真心が、私たちを通して神への感謝の念を抱かせることになるのです。¹²なぜなら、この奉仕の業は、聖なる者たちの欠乏を補うだけでなく、神への多くの感謝〔別訳→多くの人の感謝〕で満ち溢れるものになるからです。¹³この奉仕の業を通して、彼らは、あなたがたがキリストの福音を従順に告白していること、また、自分たちや他のすべての人々と真心から交わっていることを確かに知って、神を崇めるでしょう。¹⁴さらに、彼らはあなたがたに与えられた極めて豊かな神の恵みを見て、あなたがたを慕い、あなたがたのために祈るようになるのです。¹⁵言葉では言い尽くせない賜物のゆえに、神に感謝します。

マルコによる福音書 14章1～9節

¹さて、逾越祭と除酵祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、どのようにイエスをだまして捕らえ、殺そうかと謀っていた。²彼らは、「祭りの間はやめておこう。民衆が騒ぎ出すといけないから」と話していた。

³イエスがベタニアで、規定の病を患っているシモンの家において、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、その壺を壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。⁴すると、ある人々が憤慨して互いに言った。「何のために香油をこんなに無駄にするのか。⁵この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。」そして、彼女を厳しくとがめた。⁶イエスは言われた。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。私に良いことをしてくれたのだ。⁷貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。しかし、私はいつも一緒にいるわけではない。⁸この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もって私の体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。⁹よく言うておく。世界中どこでも福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・9月13日「聖霊降臨節第17主日」の日課主題は「奉仕する共同体」。

・旧約日課は、「申命記」から、同胞隣人の負債を義務的に免除することを規定する箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙二」から、聖なる者たちへの献金に対する姿勢を教える箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、主イエスが香油を注がれたことを伝える説話箇所。

旧約日課(申命記 15 章より)

・「申命記」は、ユダヤ教正典(ヘブライ語聖書)の区分で「律法(トーラー)」の最後に置かれた歴史物語文書。「出エジプト記」から始まる「モーセ物語」の完結部を構成し、その大半が死期を自覚したモーセの訣別説教として編集され、また最後には、後継者ヨシュアの指名と彼の死に関する伝承が納められている。

・日課箇所は、モーセの訣別説教の枠(1～28章)の中に置かれた律法の諸規定の一つ。訣別説教は、前半(11章まで)がエジプトから導き出されて歩んできた40年の荒野の旅を振り返りつつ、その旅路の中で与えられた主の律法(戒め、掟、法など)の意義を告げる内容で展開し、後半(12章以下)には、かつてシナイ山で示されとされる具体的な律法の諸規定が再提示される内容となっている。ただし、この後半に納められた諸規定は、「出エジプト記」から「民数記」までで記述された律法諸規定と必ずしも一致せず、他方で、一部に王国的定住生活を前提とした内容の諸規定が含まれるなど時代錯誤的なもの。

・日課箇所の「七年目ごとの負債免除の規定」は、後段12～18節と共に、レビ記25章にある「七年目ごとの休耕、およびそこから派生する債務奴隷解放の規定」が再解釈されたものと考えられている。「七年目ごとの休耕規定」は、出エジプト記23:10～11でも規定されており、そこでは続く箇所(出23:12)に七日目ごとの安息(休業)規定が置かれており、「十戒」を法源とする規定であることが示されている。「十戒」で規定される「七日目ごとの安息日規定」は、バビロニア文明でも知られ、宗教祭儀暦としての意義と共に、王国官僚らの義務的休業規定としての意義があったとされる。他方、「七年目ごとの休耕規定」は、元来、純粋に農業技法上の必要から実践されてきたことで、エジプトのナイル川のように毎年の洪水により土壌が自然に更新される場合を除けば、多くの土地で必要に応じて行われてきた。これを「七年目ごと」と定時的に定めているのは、一定の農業環境で継続的に耕作が行われているときには有効であるが、土地や環境あるいは作物が変わったときには適用が困難であるため、規定そのものは死文化せざるを得なかったと考えられる。そこで、これを「債務免除の規定」として再解釈することが進んだのかもしれない。ただし、それもどれほど実践されたかは不明。

・日課箇所中では、「手」と訳されるヘブライ語「ヤド」という語が繰り返し用いられている(2,3,7,8,10,11節)。その内、2節および3節は「手」と訳されていないが、負債を免除することが、原文では「あなたの手が負債を手放す」と表現されている。

使徒書日課(Ⅱコリント9章より)

・「コリントの信徒への手紙二」は、「パウロ書簡集」の第三に置かれた書簡文書。パウロが独自の宣教団を組織してマケドニア伝道を実施した後、一時的な活動休止をするために滞在したアカイア州コリントで、ローマの教会共同体出身のユダヤ人夫妻アキラとプリスキラと共に参画した同地会堂における宣教活動によって形成された教会共同体に宛てて記した一連の書簡の一つ。正典新約聖書には「手紙一」と「手紙二」のみが納められているが、両書簡の記述から、他にも複数の書簡が著されていたと推認されている。なお、一部の聖書学者は「手紙二」をそれら一連の書簡の中から複数の書簡を組み合わせた二次的複製物とみなしている。「手紙一」および「手紙二」の執筆動機や目的については、過去の資料「聖書と祈りの会 260715」などを参照。

・日課箇所は、8～9章で集中的に扱われる「聖なる者たちのための募金(献金)に関する勧め」の最結部。一連の勧めは、「聖なる者たちを助けるための慈善の業と奉仕」(8:4)また「聖なる者たちへの奉仕」(9:1)として位置づけられる募金に関するもので、パウロがすでにマケドニア州の諸教会で取り組んできたことをコリントの教会でも呼びかけてきたものである。この活動に関しては、「手紙一」でも「聖なる者たちのための募金について」(Ⅰコリ 16:1)として触れられており、これが、マケドニアの諸教会だけでなく「ガラテヤの諸教会」(同節)に対しても呼びかけられていたものであることが示されている。ただし、『ローマの信徒への手紙』では、この募金について触れて、「マケドニア州とアカイア州の人々」の活動として紹介している(ロマ 15:25)。いずれにしても、これらの募金先の「聖なる者たち」は、パウロがときに広義に用いる「キリスト者」の意味ではなく、「エルサレム」の教会の人々のことである(ロマ同節、Ⅰコリ 16:3)。パウロは、独自の宣教団を組織した頃に「エルサレム」教会すなわち「使徒たち」との関係を悪化させていたと推認されるが、その関係を回復させ、自分の宣教によって立ち上げた教会に「エルサレム」の使徒的教会との関係を保たせるために、この募金(献金)を呼びかけていたと考えられる。パウロは、「エルサレム」の「聖なる者たち」の経済的困窮を募金呼びかけの理由として強調するが、それは、諸教会を募金に協力させるための方便としての側面が強かったと考えられる(もちろん、実際に困窮していた事実があったのだろう)。

・「恵み」(8,14,15節)はギリシア語「カリス」、「感謝」(11,12節)は「エウカリスティア」で「カリス」の派生語。15節「感謝します」は「カリス」の特殊な用法。

福音書日課(マルコ 14 章より)

・日課箇所は、「受難物語」中の水曜日(過越祭と除酵祭の二日目)に設定された出来事を伝える箇所、祭司長らの計略の進行を伝える説話(1~2 節)と、食事の席で香油を注がれた主イエスの発言を伝える説話(3~9 節)が重ねて語られ、後段には「ユダと祭司長たちの取引」の場面(10~11 節)が続いている。「計略」の場面から「取引」の場面へと展開する構成は共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)に共通しているが、ルカ福音書は「香油注ぎ」の場面をここでは省いて、代わりに旅の途上での別の出来事に置き換えて伝えている(ルカ 7:36~50)。また、ヨハネ福音書は、場面設定の日付が異なるが「受難物語」の導入として「香油注ぎ」の出来事を伝えており(ヨハネ 12:1~8)、ルカ福音書の省略にもかかわらずこの出来事が「受難物語」を構成する重要な場面として共有されていたことが推認される。

・「香油注ぎ」の出来事について、「ルカ」を除く三福音書(マタイ、マルコ、ヨハネ)は、共通して「ベタニア」という地名を明示している。「ベタニア」の位置については、エルサレムの郊外 3 キロ弱(ヨハネ 11:18「15 スタディオンほどのところ」)で「オリーブ山のふもと」(マルコ 11:1)にあった集落と推定されるが、「ヨハネ福音書」は「ヨハネが洗礼を受けていたヨルダン川の向う側」(ヨハネ 1:28)にも「ベタニア」と呼ばれるところがあつたとしている。「ヨハネ」によれば、エルサレム郊外の「ベタニア」には「ラザロ、マルタ、マリア」の三姉妹の家があつたとされ(ヨハネ 11:1)、「香油注ぎ」はそのラザロらの家での出来事として描かれており、伝統的に、マタイとルカが描く「重い皮膚病の人シモン」(3 節)と「ラザロ」が同一視されてきた。

・この出来事で用いられた香油を、マタイは単に「極めて高価な香油」(マタイ 26:7)としているが、他の三福音書(マルコ、ヨハネ、またルカ)は「ナルドの香油」と指定している。これは、ヒマラヤ山脈を産地とする植物である「ナルド」から抽出した香油とされ、高値で売買されていた。現代でも「スパイクナード」の呼称の精油として用いられている。

・この出来事の意味を、三福音書(マタイ、マルコ、ヨハネ)は異口同音に主イエスの言葉によって、「埋葬の準備」(8 節)と位置づけている。ただし、「受難物語」の終わりで墓に埋葬された主イエスの遺体のために女性たちが持参したのは、「ナルドの香油(ムーロン・ナルドス)」ではなく、「(塗るための)油」と「香料(アロマ)」とされている(16:1)。この「(塗るための)油」は、いわゆる「油注ぎをする(アレイフォー)」という意味の用語で表現されており、これと「香油」の組み合わせを無理に解釈すれば「香油注ぎ」になる、ということなのだろう。

来週の誕生日 (9 月 13 日~19 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-13「みつかいとともに」(= I 162 番「あまつみつかいよ」)は、18 世紀英国の独立教会牧師ペロネーの作詞。曲は、18-19 世紀米国でピューリタン教会の牧師を務めたホールデンがこの詞のために作曲。
- ・21-567「ナルドの香油」(= I 391「ナルドの壺」)は、19-20 世紀米国の会衆派牧師パーカーの作詞作曲。パーカーが説教後の讃美歌として自作。20 世紀後半以降の英語讃美歌では採用されていない。
- ・21-430「とびらの外に」(= I 240「とどせる門を」)は、19 世紀英国の著名な讃美歌作家ウィリアム・W. ハウが黙示録 3:20 に基づいて作詞。『讃美歌 21』では全面的に改訳されている。

21-13「みつかいとともに」**All hail the power of Jesus name!**

1. All hail the power of Jesus' name! / Let angels prostrate fall; / bring forth the royal diadem, / and crown him Lord of all. / Bring forth the royal diadem, / and crown him Lord of all.
2. Ye chosen seed of Israel's race, / ye ransomed from the fall, / hail him who saves you by his grace, / and crown him Lord of all. / Hail him who saves you by his grace, / and crown him Lord of all.
3. Sinners, whose love can ne'er forget / the wormwood and the gall, / go spread your trophies at his feet, / and crown him Lord of all. / Go spread your trophies at his feet, / and crown him Lord of all.
4. Let every kindred, every tribe / on this terrestrial ball, / to him all majesty ascribe, / and crown him Lord of all. / To him all majesty ascribe, / and crown him Lord of all.
5. Crown him, ye martyrs of your God, / who from his altar call; / extol the Stem of Jesse's Rod, / and crown him Lord of all. / Extol the Stem of Jesse's Rod, / and crown him Lord of all.
6. O that with yonder sacred throng / we at his feet may fall! / We'll join the everlasting song, / and crown him Lord of all. / We'll join the everlasting song, / and crown him Lord of all.

21-567「ナルドの香油」**Master, No Offering**

1. Master, no offering, / Costly and sweet, / May we, like Magdalene, / Lay at Thy feet; / Yet may love's incense rise, / Sweeter than sacrifice, / Dear Lord, to Thee. / Dear Lord, to Thee.
2. Daily our lives would show / Weakness made strong, / Toilsome and gloomy ways / Brightened with song; / Some deeds of kindness done, / Some souls by patience won, / Dear Lord, to Thee. / Dear Lord, to Thee.
3. Some word of hope, for hearts / Burdened with fears, / Some balm of peace, for eyes / Blinded with tears, / Some dew of mercy shed, / Some wayward footstep led, / Dear Lord, to Thee. / Dear Lord, to Thee.
4. Thus, in thy service, Lord, / Till eventide / Closes the day of life, / May we abide! / And when earth's labors cease, / Bid us depart in peace, / Dear Lord, to Thee. / Dear Lord, to Thee.

21-430「とびらの外に」**O Jesus, Thou art standing**

1. O Jesus, thou art standing / outside the fast-closed door, / in lowly patience waiting / to pass the threshold o'er: / shame on us, Christian brothers, / his name and sign who bear, / O shame, thrice shame upon us, / to keep him standing there!
2. O Jesus, thou art knocking; / and lo, that hand is scarred, / and thorns thy brow encircle, / and tears thy face have marred: / O love that passeth knowledge, / so patiently to wait! / O sin that hath no equal, / so fast to bar the gate!
3. O Jesus, thou art pleading / in accents meek and low, / "I died for you, my children, / and will ye treat me so?" / O Lord, with shame and sorrow / we open now the door; / dear Savior, enter, enter, / and leave us nevermore.